



Title	p4c 日記
Author(s)	安谷屋, 剛夫
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 197-210
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68192">https://hdl.handle.net/11094/68192</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

### 2017 年 2 月 A p4c in the class of ethics

3 年 1・2 組合同クラスの倫理の授業。

生徒数 31 人、しかし欠席が多く、今年最後の授業は 25 人。

前回の続きで p4c。

p4c を楽しみにしている男子生徒が数名いるが、その他の生徒はほとんどやる気なし。

ほとんどの生徒は進路も決まり、あとは卒業式を待つだけの消化試合だ。

運転免許の卒検の方が、多くの生徒にとってはリアルな話で、授業中でも教習所の教科書とにらめっこしている姿もちらほら見える。

やる気なし。

私ももう、やる気などは特にないが、

ごく自然に、当たり前のように彼らに声を掛けた。

「じゃ、前回 p4c に参加しなかった人たちでやろう。12～3 人。他の人は外側で見てて。何か話したいことがあれば手をあげてくれればボール回すから。」

もちろん即座には動かない。

生徒が動かないときは無理に動かそうとすると逆効果だ、ということとはよく知っている。

指示的な言葉は多ければ多いほど薄れていくものだ。

出席を確認して、余紙とサインペンを準備する。

とにかく自分の作業に集中。

すると彼らがガラガラと、仕方なさそうに動き始める。

「え～」という消極的抵抗の声、「こんどはおまえが出ろよ」「いやいや俺はいいよ」とか譲り合う声、あきらめたように椅子を並べ出す音、いろんな音が教室の中に雑多にこだまする。

こういう「うんざり感」は授業者にも伝染するから、できるだけ聞こえないように準備に1人没頭する。

輪ができる。

輪ができてそこに座ると覚悟が決まるのだろうか、みんな p4c モードの入口に並んだ。

紙を回し、p ネームを考えて書く。

このクラスでは、4 回目の p4c で、だいたいの流れはみんな分かる。

p ネームを書き出すと、少し空気が浮き立ってきた。

私は考える。

今日の名前はでしょう。

私はたいてい、そのときの気分で名前を決めるのだ。

アダニーとかアニーなどの名前を、何も考えずに出すこともあるにはあるのだが、

この日は自分にじっくりくる名前を探したかった。

昨年12月の終わりから、ある出来事が原因で、40日も山小屋に閉じ込められ、いまは山を下りて自宅待機をしているA君のことを思い出す。

思い出す、というかいつも彼のことを考えている気がするし、この教室にはいまだに彼の影が消えないシミのように残っていて、誰もがそのシミの存在を感じながら倫理の授業を過ごしてきたのだ。

彼とは倫理と現代社会の授業で、週に4回、顔を合わせてきた。

授業中、彼はいつも刺激的な発言をしてくれて、そのおかげで授業が毎回盛り上がった。対話はいつも、彼と私を中心に、数名の決まった生徒が参加していた。

「人を殺すのはなぜ悪いのか」

「学校に自由はあるのか」

「学校は正しい教育をしているのか」

「洗脳に気づくにはどうしたらよいのか」

どれも刺激的で、私を惹きつける問いばかりだった。

あの日、彼ははじめから何かに腹を立てていたように思えた。そうではなかったかもしれないが、結局彼は、授業の終わりには明らかに腹を立てていた。

そしてその日の夕方、彼は街を牛耳るボスの手下に捕まり、それから40日間、山小屋に閉じ込められた。

あの授業が終わったあとから捕まるまでのおよそ6時間の彼の心の軌跡を、私は何度も辿った。

ボスの手下の者どもがとった彼の調書をもとに、何度も何度も辿った。学校を退学になるか、卒業延期になるかは微妙なところだ。この一件でもう3回も職員会議が開かれて、まだ結論が出ない。職員会議ではっきりしたことは、2種類の教師がいるということだけだ。「生徒を教育をする教師」と「生徒とともに教育を生きる教師」。

いずれにしても、いまA君はいまここに居ず、その重たい痕跡を残しているだけだ。

今日のpネームは「アダニーチェ」にしよう。

何度か使ったことがある名前だけど、やはり「アダニーチェ」が

いい。

「みんなに聴いてみたい問いはない？」  
いつものようにみんなに尋ねる。  
すると少し間を置いて、隣の男子生徒が応えてくれる。  
「いまハマってること」

この生徒からボールが回った。  
「仮免。もう2回も落ちてる。今度受からないとほんとにやばい。」  
来月にはみんな島を出るから、それまでに免許をとらないと面倒なことになるのだ。  
ボールが私に来る。  
じっくり考える。  
ハマってること？

近頃の私は全然冴えない。いつもA君のことを考えている。  
でも思い出した。  
この1週間で2度。  
山小屋で彼とニヒリズムについて対話をしたのだ。

「ハマってることは、山小屋でのA君との対話。めちゃくちゃ面白かった。」

空気が一気に軽くなったのが分かる。  
みんなが感じてた彼の影が、くっきりとした形をとり、みんなの対話相手として現れてきたかのよう。  
あいつはいろいろやばいやつだけど、みんな彼を好きなのだ。

「なんであんなに面白かったんだろう。1度目は、あいつ泣きながら私を非難して、2度目はつきものが落ちたように、さわやか

な笑顔で俺を迎えてくれた。いや、ほんとに面白かったんだよ、彼と話すのが。ああいう特殊な空間だったからかな。無味乾燥なコンクリの壁とか、壁の高いところにあるの小窓とか、そばで無言のまま対話内容をメモしてる手下とか。妙な緊張感があったな。」

みんなニコニコしながら私を見ている。

「なんならもう一度、あそこに入ってくれないかな。」

そう言うと大爆笑。

私も久しぶりに心から笑った気がした。

「どんな話をしたの？」

「ニーチェのニヒリズム。A君が、生きる意味なんてないって言って泣くから、ニーチェという人も100年以上前にそう言い切っていた、と話したんだ。みんな生きる意味って何だと思う？」

「オモーい。そんなこと考えたくない。」

「A君もそう言ってた。山小屋に閉じ込められて、こんな状況で生きる意味なんてきつすぎる、って言ってたよ。でも正直言って僕には分からないんだ、その重さってのが。人生に生きる意味なんかないって本当に分かったら、もっと身軽に、もっと明るく生きれる気がするんだ。彼にもそう言ったけど、聴いてくれなかったね。」

ボールは次に回る。

パスが2～3回続いて1人の男子生徒。

「いまハマってるのはここに居る時間。授業とか休み時間とか、とにかく学校にいる時間。自分は就職が決まってるんで、卒業したらもうこんなに自由な時間ないと思うから」

なんとなくみんなしんみりする。

「しんみり」は場に流れている水脈が、体の中に浸透してくるような心地よい言葉だ。

みんなが同じ土俵に上がった気がする。

圧力のない、自由な土俵。

みんな一緒に居る。

そこからテーマは卒業になる。

卒業するってどういうことだろう？

「いまの時間がキラキラすること」

これはバレー部の女子。

「どういうこと？」

「なんかもう終わりって思うとキラキラしてみえる」

「キラキラするって、何がキラキラするんだろう。教室だって、生徒だって、学校だっていつものとおりでしょ。みんなが卒業して居なくなっても、人は変わるけど学校はそのまんまでしょ？ひょっとすると、ずっとキラキラしていたのに気づかなかっただけなんじゃない？」

「もう時間がないって分かるから、大事にしたいくなる。」

そう、この時間を大事にしたいと私も思った。

---

## 2017 年 4 月 kendo-bu in budoujyo

4 月になってからやっと武道場に顔を出せるようになった。

この半年間、苦手な仕事が山のように襲いかかってきて、部活ど

ころじゃなかった。

部員は男子3人、女子1人。全員3年生だから未来のない部だ。  
それでも5月末のインターハイ予選に向けて、彼らなりに懸命に  
頑張ってきた。

歳のせいかな、あるいは不摂生のせいかな、稽古をしていてすぐに息  
があがる。

でも、彼らと竹刀を交えている時だけは、私は教員ではなく、お  
っさんでもなく  
ただ戦う者になる。  
それはつねにみずみずしい経験だ。

生徒の竹刀と中心を取り合い、相手の竹刀のやや下側を攻めて相  
手が引く瞬間、  
私の体が瞬時に伸び上がり、竹刀が面を叩く。  
その時、少しでも躊躇すると、逆に長身のヤツの竹刀が私の面に  
覆い被さってくる。  
そういうやりとりをしているとき、  
まだまだイケるかも、と思う。

面をとって息を整え、思う存分水を飲めば、体の全部が喜んでい  
るのが分かる。  
海の中でえら呼吸している魚になった気分だ。

全身が進行する時間をしっかり捉え、達成感と充実感がせり上が  
ってくる、その先端に、  
私はしばしばぐらをかいて世界を見下ろす。

そういうハッピーな時間はその日の就寝で終わる。  
明日は地獄になる。



体も心も鉛になる。

世界が見えなくなる。

自分と世界との境界すら分からなくなる。

そんな中で、もう何回、p4cをやってきただろうか。

---

## 2017年5月 A dream of p4c at the orange-shop

F：今日のスタートラインは「学校で p4c をやり続けること」についてです。自由に話してもらって構わないですが、最初は、ここに2年ぶりに参加してくれたアダニーチェさん、いかがですか？

アダニーチェさんはいま、南の島の高校で p4c をはじめて3年目だよ。いろいろ大変だったって聞いているけど？

A：みなさん、お久しぶりです。ここに来るのはほんとに久しぶりで、めっちゃ懐かしいです！

ここを卒業して南の島に行ってから2年ぐらい、一言では言えないけど、やっぱりいろいろ大変でした。でも楽しいこともあって、それはしょっちゅうあるわけではないけど、回数が少ないだけで一つひとつはとても大きい、というか。

B：でも確か、以前アダニーチェさんがここに居たとき、学校で p4c をやることに葛藤などはないはずだ、って勇ましく言ってなかった？

A：言いました（笑）。あのときは、少しでも迷いがあると葛藤するけど、迷いがなくなってふっきれた感じになれば葛藤なんか超越する、みたいなことを偉そうに言ってました。だから、結局、日々迷いながら2年間を生きてきたのかもしれない。

F：何をどう迷ってたんですか？

A：そうですね。学校という「反教育的」な制度の中で p4c をやるっていうこと。うーん、というか、p4c をやろうとすると、学校という旧態依然とした制度がいちいち反教育的に現れてくる。教育と反教育との葛藤。そこをうまく通らないとトラブルにな

るし、それだけじゃなくて、たとえば今まで受けてきた教育をうまくこなしてきた優等生なんかは、「何この人？」みたいな目でぼくを見たりする。教科書どおりに進めてよって感じで。だから迷う、躊躇する。ますます p4c が重くなる。そこを乗り越えていった人って、一体どういう闘い方をしたんだろうと思います。

C：闘い方かなあ。そもそもなんで闘わなければならないんですか？

A：たとえばやりたいことがどんどん出てきて、それをやってくことに没頭して前に進んでいるとき、つまり波に乗ってるときなんかは、きっと周囲をいい形で巻き込んでいってると思うんです。それが一番いい形。でも、なかなか波を掴まえないことが多くて、それで悪戦苦闘しながら続けている、そうすると極端なばあいは何らかのトラブルが起こる。そのトラブルが周囲の人を巻き込んでしまうっていうか。このばあいは迷惑をかけるってことだけど。

C：たとえば？

A：たとえば、p4c をやってる生徒は、理屈っぽくなるとか、挨拶しなくなる、みたいなことを言われたことがあります。

F：なかなかしんどそうですね。なのになぜ続けてるんですか？

A：そういえば、p4c を続けるか続けないか、ということで迷ったことはないですね。「やめる」という選択肢はないです。地味に続けてるのは、空気を吸うとか水を飲むのと一緒で、ほかに自分の有り様がない気がします。ほんとうは、1年目はこういうことをやった、2年目はそれをさらに広げた、という風に、だんだんと形が出来ていくのが理想かもしれない。でも、そんなことを望むのはとうてい無理で、ただじっとうずくまるようにやり続けている。それしかないし、そうしていると少しずつだけど、やはり変化が生まれてきます。少なくとも、はじめは息苦しくて仕方なかったのが、いつの間にか少ない酸素量でもなんとか活動できるようになってくる。

- C : さっきアダニーチェさんが、「波を掴まられない」みたいな話をしたけど、仕事をしていて波に乗れるときと乗れないときって確かにある気がしますね。私も数年前に会社勤めをはじめただけど、自分の動きや意図がずっと周囲に伝わって、仕事の流れるときがあります。体調とか、自分自身の調子も関係してるのかもしれないけど、やはり人間関係かな。それを常にメンテナンスしているといいような気がします。
- D : メンテナンスは大事だね。何事も放っておくとさび付いてしまうからね。
- F : でも、たとえば料理人が包丁をメンテナンスするのは、それが仕事の道具だからですね。しかし人間関係は包丁みたいに道具って割り切れるのかな。
- D : というより、道具と自分との関係を磨くのがメンテナンスなんじゃない？
- C : じゃあ人間関係のメンテナンスって、文字通り自分と他人との関係のメンテナンスですね。  
上司や部下との関係をメンテナンスする。コミュニケーション。そういえば、料理人が包丁を研ぐのは、包丁とコミュニケーションをしているようにも見えますね。
- F : なるほど。じゃあ p4c のばあいには、どうでしょうか。p4c のメンテナンスって、どういうことになるのでしょうか。料理人と包丁との関係に置き換えることができるのでしょうか。たとえばハワイ大学の Dr.J が p4c をやってるのを見たことあるけど、p4c を神業のようにうまく使いこなしているようにも見える。
- B : たしかに、good-thinker's tool をうまく使ったり、子どもが喜ぶような表情や声色を使ったり、おもちゃを効果的につかったりしている。でもそれらは p4c のための道具であって p4c そのものじゃないでしょ。p4c って、具体的な、個々のこどもとのコミュニケーションじゃないですか。
- Dr.J はただ純粋に子どもたちと一緒に、探究をしているだけな

んじゃないかな。

C：ということは、p4c のメンテナンスっていうのがあるとすれば、それは Dr.J が使っていたような探究のための道具が、いつも自分の手に馴染んでいるということかな。たしかに good-thinker's tool に精通していれば、p4c も動いていくはずだし。

A：ぼくのばあい、p4c のメンテナンスという言葉で思いあたるのは、ある特定の作法みたいなものですね。最初に p ネームをつくって、小さな問いをみんなで答えていって、ボールを回していくある種の儀式。儀式をきちんとやっていると、p4c 自体が動いていく。というか、p4c が降りてくる。

F：p4c が降りてくる。するとファシリテーターは巫女さんみたいな？

A：そうとも言えるかも知れません。少なくともそんな風に感じたことが何度かありますね。逆にファシリテーターとして肩肘張っていたり、対話のゆくえが心配になってどうにかしなくちゃなんて考え始めると、苦しくなって対話が進まなくなる。とてもじゃないが対話を意図的に誘導したり動かすことなんてできないんです。でもそんなとき、動揺する自分から離れて儀式に没頭していると、不思議に p4c の方が勝手に降りてくることがある。そして霊みたいに、p4c が参加者全体に憑依する。

F：憑依？ 憑依されたって実感はあるんですか？

A：あります。憑依の肌触りまで分かる気がします。ある人の発言がきっかけになって、一瞬で共同体ができてくる。一緒に居るっていう空気感がどっと押し寄せてきます。

B：そう考えてくると、つまり p4c のメンテナンスって、p4c を降ろすための作法、p4c を招くための環境づくりっていうことなのかもしれませんね。

D：そう、そしてその環境の中で一番の肝は、巫女さん、つまり哲学者の存在なのでしょうか。哲学者が輪の中に居なければ、p4c

降りてこない。

A：最近、ほんとに痛感することなんだけど、「哲学者」の反対語は「教師」なんじゃないかなって思う。教師はつねに教えようとする。最近では「アクティブ・ラーニング」と称して、授業の中で生徒に考えさせたり、発言させようと躍起になってる。自由に考えさせて発言させようとしながら、対話の終着点は教師の頭の中にはじめからあって、無意識的にそこに誘導しようとする。ぼくにもそういう部分があるけど、ぼくの中の「教師」を意識的に消し去らないと、p4cは絶対に降りてきてくれない。巫女の仮面をかぶった、もっとも不純な何かです。

C：哲学者と教師との違いは何ですか？

A：哲学者は自分と世界との関係をつねに吟味するけど、教師はしない。教師は知を所有していて、その知は増えることも減ることもなく固定していて動かない。教師は動こうとしないんです。自分が無知であることに無知だから。

C：でもAさんの職業は高校教師でしょ。巫女さんであることと矛盾するでしょ？

A：それが迷いだっただと思います。でも、以前は巫女さんの仮面をかぶった教師だったけど、いまは教師の仮面をかぶった巫女さんです。まだまだ巫女さんとしては未熟なのですが。

C：うーん、でも何か難しそうですね。私が高校生だったとき、そんな教師はいなかった気がするし、それでも学校は好きだった。あの、独特な無気力感とか、気だるさとか。放課後、いつまでも教室に残ってダラダラおしゃべりしていたり、楽器を鳴らしていたり。ああいう場って、貴重だったと思います。いま思い返すと、ちょっとウソっぽい言い方になるけど、あの場が私たちを見守ってくれていたような気がする。

F：場が見守っていた？

C：そう。学校って基本的にバラバラでしょ。イケメンがいて、イケジョがいて、オタクやださいのや真面目なのがいったり。世界

が違うでしょ。それぞれのグループに分かれて、その間にはほとんど交流がない。ケンカはたまにあったけど。同じクラスでも名前すら分からないヤツだった。だけど、そういう亀裂をやさしく見つめていた存在が居た気ようながするんです。怖い先生もいたし、訳の分からない教師もいた。それも全部包み込んでいたのが学校という場だったんじゃないかな。

混乱も、喜びも、悲しさも、寂しさも、忙しさも、全部そこで生まれてそこで消えていく場。教師なんか基本的に存在感はなかったですよ。だからもっと安心していいんじゃないですか、学校の先生は。ほっといても無数の出来事がそこで起こってるし、たまにバラバラな小宇宙を全部巻き込むようなことだって起こるかもしれない。

A：バラバラな小宇宙が、誰かの発言や行為がきっかけになって、一つの「問い」に巻き込まれる。そういうことがたまに起こってるのかもしれない。中にいると、その全貌を見ることはできないのだけど。…あ。いま見えた気が…

ジリリリリリリリリ

安谷屋：やばい。今朝も寝坊だ。職員朝会に間に合わないかも…。

---

## 2017年6月 A game of high-school kendo

アズサは人一倍、稽古熱心だ。

稽古量は県内のどの強豪校にも負けないぐらい、頑張っている。でも、自分の癖が直らない。

面に出るとき、左足が動くから相手に分かる。

だからアズサがどんなに早く打ちに出ても、よけるのは簡単だ。それに、竹刀で中心を攻められると、竹刀を持つ左手が上がって隙だらけになる。

いつもそのポイントで逆胴を切られて負ける。  
4月の合宿以来、ずっとそれらの癖を指摘してきた。  
自分の癖、自分の体の動きを自覚しないと、自分も相手も見えなくなる。  
でも、それが一番、難しい。  
どんなに苦しい稽古よりも苦しい。

一週間前からはそのことを指摘しなくなった。  
ここまできたら、あとは自分らしく闘うしかない。  
行け、アズサ。  
面をかぶった彼女の背中を大きく叩いて試合場に送り出した。  
案の定、2本とられて負けた。  
はじめから分かっていた負け方だった。  
体の動きを自覚するのは難しい。  
長年の癖を直すのは難しい。  
でも、全力で闘っている彼らの姿を見るのは楽しい。  
すべての癖が、一瞬一瞬、彼らの存在を証明している。  
悔しさがほろ苦く、泣いているアズサの姿が美しい。

(あだにやたかお)